

特徴（詳細版）

伊勢志摩国立公園は、志摩半島の大半を含む三重県の中央部を占めています。6万ヘクタールに近い広大な面積を有しています。公園の内陸部には、なだらかな山の斜面と緑の生い茂る森が、日本でもっとも重要な神社である伊勢神宮を取り囲んでいます。伊勢神宮の社は、日本的精神の中心をなしています。多様な地形のある海岸線は、ギザギザした岩礁や段丘、砂浜があるなど様々な景観を作りだしています。多くの国立公園とは異なり、伊勢志摩国立公園は私有地が多く、伊勢市、鳥羽市、志摩市、南伊勢町の4つの市町の住民が住んでいます。伊勢志摩の人々の生活、歴史、文化、慣習は、公園の豊かな自然の景観と深く結びついています。古代から、伊勢志摩の人々は自然と共に暮らし、自然を尊敬してきました。

保護林の中に座する伊勢神宮は、約2000年前に創建されました。日本の神道の中心地です。神宮は、太陽の神であり天皇家の先祖神である天照大御神をまつる内宮と、衣食住の神である豊受大御神をまつる外宮の2つの主要な神社に加えて、伊勢志摩地域の125の関連する神社で構成されています。

周りの美しい木々と五十鈴川の透明な水があれば、この地域が神域として選ばれた理由が容易に見て取れるでしょう。伊勢志摩の川は森から重要な養分を海へ運びます。この豊穡な自然環境によって、伊勢志摩の海産物は、昔から質の良いことで評判をとっていました。古代には、それらの海産物は天皇家に献上されていました。今日でも、伊勢志摩のシーフードは高く評されており、神々に感謝を捧げる古代からの何千もの儀式も、現在も行われています。

海の生物の個体数を保護することの重要性が、海女として知られる女性ダイバーの集団の規則に見られます。伊勢志摩の海女たちは、海の底まで（呼吸装置を使わずに）潜ってさまざまな海藻や貝類を採集します。彼女たちは、3000年以上もこの地域の歴史の一部を担っていると考えられています。海女の集団がいる多くの場所では、潜水と採集を行うにあたっての厳格な規則があります。例えば、一般的にアワビは長さが10.6センチ以上のものでなければ採集できません。アワビがこれよりも大きなサイズであれば3歳以上であり、少なくとも一回は産卵している可能性があるということなのです。海女

が潜ることのできる場所と、時間は厳しく制限されています。そうした規則によって、海女が貝類や海藻類を何世紀にもわたり持続的に収穫できるようにしてきたのです。伊勢志摩国立公園では、海女や彼女たちの古くからの慣習を身近に接することができます。また、海女が収穫した新鮮なシーフードを、海女小屋で料理してもらって食べる体験を楽しむこともできますし、海女と一緒にダイビングできる体験プログラムもあります。

最近では、自然と共に、自然を尊重して生きるという昔からの考え方が、「里山」や「里海」の保全活動に組み入れられるようになってきています。「里山」は、人々が自然資源を持続可能な形で使い続けるために地域の生態系を守る取り組みをしている陸の地域を指す日本語で、「里海」はその海版です。観光客は、エコツーリズムの活動に参加して、身をもってこうした考え方を理解できます。エコツーリズムには、サイクリングツアー、ガイド付きの島の漁村巡りウォーキングツアー、自然の中の遊歩道のハイキング、シーカヤックで英虞湾の複雑な海岸線の中にある入り江の探検、バードウォッチング、そして、夜の星鑑賞などがあります。